安定生産のために課題を一つ一つ改善
～作業効率改善と収量・品質upが地域へ波及～

碧南市　永井是充氏
露地野菜（ニンジン、タマネギ）

【平成 30 年 7 月 26 日掲載】

碧南市でニンジン（11月下旬～３月下旬出荷）とタマネギ（４月上旬～６月下旬出荷）を栽培し、優良経営を実現している永井是充（これみち）さんをご紹介します。永井さんは平成29年度に日本農業賞の特別賞を受賞しました。

永井是充さん

就農の経緯と基本理念

永井さんは、昭和 34 年に碧南市の農家の長男として生まれました。機械や電気関係に興味があり、工業系の高校を卒業して家電量販店に就職しました。勤務先で様々な経験を積む中で、人生設計とそれにかかる費用を考える機会があり、サラリーマンではなく農業で稼ごうと思い、昭和 55 年、21 歳のときに就農しました。農業を他の産業と同様に「生計を立てるための手段」として捉え、生涯賃金２億５千万円という明確な目標を持って農業に就き、それが現在においても永井さんの基本的な理念となっています。

転機と経営方針の決定

就農当時の永井家は、ニンジン、タマネギ、カンショ、キャベツ等年間７品目を栽培していたので、定植や収穫といった収益に直結する重要な作業時期が重なる上、雨天などの影響で計画どおりできないことが頻繁にありました。「リスク分散のための多品目栽培が、むしろリスクを高めている」と感じた永井さんは、農協の理事に就任した父の代わりに畑の実務を行うようになった昭和 58 年頃から品目を減らし、最終的にニンジンとタマネギの２品目に絞りました。品目を絞ったことにより、品質及び収量の向上に力を注げるようになり、「いいニンジンといいタマネギを作る！そのためにやるべきことに一つ一つ取り組んでいく」ことが経営方針となりました。

精力的な取組のいろいろ

作業の省力化

就農前の経験や知識を活かし、作業を省力化できる機械の導入や自作による機械の改良により、露地野菜の重労働を一つ一つ改善していきました。当時、ニンジンの収穫から出荷までがすべて手作業で特に重労働だったことから、選別と出荷の省力化のため、ニンジン重量選別機、積み降ろしのフォークリフトなどを産地で初めて導入しました。平成８年にはニンジン収穫機を産地で一斉に導入しました。

ニンジン収穫機

さらに、自宅の作業場で、調整～選別～箱詰めが一連の流れでできるオリジナルの選果ラインを考案し、自作の異物除去機やオーダーメイドのベルトコンベアーなど試行錯誤を繰り返して完成させ、作業効率は導入以前の３倍以上となりました。永井さんの選果ラインは他の部会員にも波及し、今では部会全戸で導入されています。永井さんは、一連の機械作業のため大型の倉庫兼作業場を自作で増築したり、タマネギでも同様に選果ラインを導入するなど、作業効率を大幅に改善しました。

「碧南美人」

● 品種の改善と品質アップ ●

平成に入るころまで、ニンジンの品種は在来系統の「碧南鮮紅五寸」を作っていましたが、長さがばらつくなど品質が安定しませんでした。そこで永井さんは、研究意欲のある部会員とともに研究会組織を立ち上げ、優良品種の選抜や栽培技術の試験に取り組みました。種苗会社や取引市場などとも連携して食味調査も実施し、品質がそろって食味の良い「碧南美人」シリーズが誕生しました。

タマネギでは、４月に出荷できる品種がありませんでしたが、種苗会社と連携して、系統の選抜や栽培技術の改善を繰り返し、新タマネギを４月にも出荷できるようになりました。また、メーカーの協力で、温湿度を制御できるプレハブタイプの乾燥設備を作り上げました。これにより、収穫後の乾燥作業が６月の雨天時でも実施でき、品質も安定するようになりました。

● 収量アップ ●

露地栽培のため、年によっては台風でニンジンが流されたり、生育が遅れて他産地と出荷時期が重なり価格が大暴落するなど大きな収益減を経験してきましたが、台風の前には一斉に寒冷紗を被せる、過乾燥には潅水を徹底するなど栽培技術の改善を行い、最近では収量も安定してきました。様々な課題を解決してきたことにより、就農当時と比べて作付面積は 2.5 倍の 570a に増えた一方で、省力化を進めて総労働時間は 1.2 倍の増加に抑え、単収はニンジン、タマネギともに全国平均の２倍程度となりました。

次世代のために進める機械化と人脈継承

産地では、永井さんの経営をモデルに機械導入が進み、省力化が図られた結果、後継者の就農が増え、現在、ニンジン部会員の約 1/4 に後継者が入っています。碧南市は工業・農業ともに盛んで、思うように規模拡大できない地域ですが、高齢化で辞める部会員のほ場を後継者の入った部会員が作付けすることで栽培面積を維持し、若手生産者も活発に活動しています。

「次世代のためには、作業の機械化が必須」と語り、今年からタマネギの収穫機の試行を始めました。また、タマネギの機械定植についても、永井さんは以前から経験がありましたが平成 30 年度作に研究会組織の３名が初めて試行するため、苗作りから指導する予定です。「今の若い世代は、いいニンジンいいタマネギを作ろうと言っても意欲向上につながりにくく、格好いいトラクターに乗るために収量上げて収益を取ろう、という方がやる気につながる」と、若手生産者に合わせてサポートをしています。また、全国の展示会に連れて行って様々な業界の人との交流の機会を作るなど、自身がやってきたように「若い世代も自分の取組をどんどん周囲に伝えて、周囲の人を巻き込んで改善を重ね、産地全体のレベルアップに繋げてほしい。そのためには支援を惜しまない。」と話してくださいました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：西三河農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2018, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.